

■ せんじやせんじや

私の研究室では、アウトドアスポーツのスキル向上のために、登山、スキー、カヌー、ロッッククライミング、ダイビングなどのキャンプを、学生が自主的に企画・運営するゼミ合宿という事業を行っています。

アウトドアスポーツは、参加するのと提供するのでは、天と地ほどの差があり、提供する側には、綿密なプログラムデザイン、過不足のない装備計画、万が一に備えた安全対策など、高度な企画・運営能力が必要となります。

もちろん、学生たちは、はじめからパーソナリティではありません。時として、万全とは言い難い状態で、フレンドにおもむくこともあります。

当然、企画・運営を担当した学生は、自分の準備不足や油断を深く悔やみ反省しますが、その困難をのりこえたとき、自然は我々を包み込むかのように、稳やかでやさしい表情を見せます。まるで学生の成長をはじめるのです。まるで学生の成長をはじめからわかつていたかのように。



2003春のヤミ合宿立山一ノ越(2650m)にて

自然が偉大なる 教師です

保健体育講座・助教授

同林
卷之三

卷之三

自然の中でキャンプを行うということは、それが大なり小なり、困難と克服の連続です。

ところが、その困難が大きければ大きいほど、本当の力というものが

氣だつた男の子は真っ先にテントの中に逃げ込んだのに対し、ずっとしんじどうだつた女の子が横殴りの雨の中、学生スタッフと一緒に、テント設営を手伝つてくれたという思い出があります。

う教育だと、なかなかこうは上手くいきません。絶対的な平等は時として対象を無視した不平等になり得るし、対象に応じた平等でも、人がやることですから偏見や嫉妬がおこります。

また、キャンプ場が台風の直撃を受けたため、子ども全員を施設に避難させ、キャンプ場の装備をすべて撤収し、テントが風で飛ばぬよう全部たたまなければならなくなつたとき、深夜まで雨の中で行う作業となりましたが、ピッチになればなるほど普段見せない集中力やパワーを發揮する学生が必ず現れました。

私たちの研究室は、これからも自然の力を借りながら、自然と人、人と人とのつなぐことのできる媒介者として、それぞれの夢に向かって進んで行こうと思います。

らこそ、このような力が發揮されるの
でしょう。

地域の自然環境と植物のくらし

理科教育講座・助教授 松井 淳



モミの大木

大峰山系にも範囲を拡大しました。原生的な自然だけが大切というわけではありません。里山や川など人々により身近な自然は暮らしの場として重要な役割を果たしています。しかし開発規模や土地利用の変化のため、自然のバランスが崩れる方向へ動いてきたと言わざるをえないのです。

手入れされなくなつた竹やぶが恐ろしい勢いでまわりの二次林を侵略したり、増えすぎたシカが樹皮や稚樹を食い荒らして森の世代交代を妨げるおそれがあり、顕著になつたり。これらの問題をどう考え、どう改善すればよいのか、壊された自然の再生は可能かについて、試行的な調査にも関わっています。

■植物だつてなまめかしい

私は本業の生態学では「植物の繁殖行動」を研究しています。これが第二の柱です。開花結実の過程には、植物自身の工夫はもとより、花粉を運ぶ昆虫、種子食害者、種子散布する動物など多くのキャストが登場するさまざまドラマがあり、観察して飽きることがあります。

ん。

具体的例を少しだけお話すると、花は、おしべとめしべが揃つたものと思い込みがちですが、植物の性は動物以上に複雑です。私が二〇〇年近く調べているウリハダカエデという樹木は、一生の間にオスから雌雄同株をへてメスに性転換する個体があ

る多數いることがわかつてきました。なぜそんな振舞いをするのか明解な答えはまだありません。

湿原に生えるミツガシワという植物があります。めしべの長い花をつける個体とめしべの短い花をつける個体があり、受粉実験をすると異なるタイプの花間で受粉したときに正常に結実する仕組みを持つていてわかります。これはヒトの婚姻システムで部族内婚を禁止して近親交配を避けるのと似た仕組みといえます。植物もなかなかやるものです。

しかし同時に、送粉昆虫がいなくなつたらこの植物が種子を作れなくなることも意味しています。保護のためにターゲットの植物だけを移植するのはナンセンスだと気がづきます。

私たちは植物の面白さや関わることの楽しさを発信することと、多くの研究者・学生・市民の交流をとおして、地域の植物の情報を集め発信するセンター的な役割を担えたらと考えています。研究室やホームページ(<http://kaede.nara-edu.ac.jp/>)にもお立ち寄りください。



ハナダカマガリモンハナブ